研究課題	複言語教育と ICT の融合
副題	~真の国際人育成を目指して~
キーワード	外国語教育、ICT 活用、デジタルポートフォリオ、国際交流
学校/団体名	公立奈良県立国際高等学校
所在地	〒631-0008 奈良県奈良市二名町 1944-12
ホームページ	http://www.e-net.nara.jp/hs/kokusai

1. 研究の背景

本研究でおこなう2つの研究課題について、それぞれの経緯・背景を以下に説明する。

① 応用可能なデジタルポートフォリオシステムの開発

令和2年4月に開校した奈良県立国際高等学校は、「国際≠英語、英語だけじゃない。真の国際人を目指して」をモットーに、日本語、英語に加え、学校設定科目「世界の言語」において5カ国語(中国語、韓国語、スペイン語、ドイツ語、フランス語)を全生徒が学ぶカリキュラムを構築している。また、本校では帰国生や多くの留学生を受け入れているため、個々の学習者の言語レベルを適切に把握することは、教育活動を円滑に実施する上で極めて重要となる。3年間を通じて、全生徒の言語能力全般を育成していくため、CEFRを活用しながら、学習者のメタ認知を喚起し、主体的に学習に取り組むことができるようなデジタルポートフォリオシステムを活用していく必要がある。

② オンライン国際交流の実践・ノウハウの蓄積

現在、コロナウイルス感染症が猛威を振るっており、海外からの人の流れが止まっている。 ネイティブスピーカーと交流する機会がほぼ失われている中で、生徒の言語能力の育成と国際 理解を促進するために、Zoom や Google Meet などの遠隔コミュニケーションツールの活用は必 須であると言える。

2. 研究の目的

複数の言語を学ぶことは、言語学習能力が向上するだけでなく、世界の多様性の理解につながることが、これまでの研究から明らかになっている(1)。このような知見を活用し本校では、複言語教育を通じで、「真の国際人」の育成を目指している。本研究では、本校が推進する復言語教育と ICT を融合することで、生徒のメタ認知を喚起し、生徒が主体的に学習に取り組むことができる学習環境の整備と、距離の制約を受けない国際交流の実践を目指すものである。本申請は、以下の 2 点の研究課題からなっている。

① 応用可能なデジタルポートフォリオシステムの開発

この課題は、2020年度の実践研究をさらに発展させるものである。2020年度は、学校設定科目「世界の言語I」において、学習者自身が学習成果をタブレット端末に記録するデジタルポートフォリオシステム「My languages Portfolio」を開発した。さらにこのシステムとCEFR

(2)に基づいた自己評価を組み合わせることで、生徒に自らの言語能力を俯瞰的に捉えさせることができた。2年目となる本申請では、1年目の成果を発展させ、どの言語や校種、教科でも使用できるデジタルポートフォリオシステムの開発を目指す。

② オンライン国際交流の実践・ノウハウの蓄積

2年生を対象とした「世界の言語II」において、ZoomやGoogle Meetなどの遠隔コミュニケーションツールを用いて、海外のネイティブスピーカーとオンラインで交流する機会を設け、コロナ禍でも世界とつながる複言語教育を実践していく。

3. 研究の経過

新型コロナウイルス感染症防止のための夏季休業延長や、その後の感染拡大防止対策のために、 申請時の計画からは一部改変が必要となった。実際に行なった研究の経過を表1に示す。

表 1. 研究の経過

時期	取組内容	評価のための記録
4月~	ICT 環境に関する教員研修(対象:全教員) 2 回実施	情報交換
4月14日	「世界の言語」オリエンテーション 授業開始	
5月6日	外部講師によるオンライン講演会(麻布大学 内山淳	アンケート (Google
	平先生) 対象:2年生生徒22名	Form 活用)
5月13日	筑波大学研究グループ(浦山俊一先生等)による探究	アンケート (Google
	学習に関するオンラインワークショップ 対象: 1年	Form 活用)
	生全生徒	
5月26日	オンラインでのグローバル教育講演会(株式会社 ISA)	アンケート (Google
	対象: 1 年生全生徒	Form 活用)
	「世界の言語」事前アンケート実施	
6月4日	旭山動物園の坂東園長と飼育員の佐賀さん、およびマ	アンケート (Google
	レーシアボルネオ保全トラストジャパン岸さんによる	Form 活用)
	オンライン講演会 対象:2年生全生徒	
6月16日	韓国延世大学教員と学生とのオンラインによる交流	
	対象: 2 年生韓国語選択者	
6月17日	旭山動物園の坂東園長と飼育員の佐賀さん、およびマ	アンケート (Google
	レーシアボルネオ保全トラストジャパンの岸さんによ	Form 活用)
	るオンライン講演会 対象:1年生全生徒184名	
6月21日	外部講師によるオンライン講演会(Miz Inc. 市川祐	アンケート (Google
	介先生、アメリカ カリフォルニア州在住)対象:2年	Form 活用)
	生生徒 22 名	

7月8日	9th International Congress of			
	the EDiLiC Association(オンライン)で世界の言語			
	に関する取り組みを発表			
8月28日	第1回世界の言語検討・研究推進委員会	意見交換、所感		
9月1日~	コロナウイルス感染拡大防止のための夏季休業延長			
9月12日	オンラインでの課題配信等による在宅学習			
9月2日	外部講師によるオンライン講演会(薬用植物資源研究	生徒アンケート		
	センター 林茂樹先生)対象:2 年生生徒 22 名	(Google Form活用)		
9月13日	分散登校、在宅学習者に対してハイブリット型のオン			
~24日	ライン授業を実施			
10月11	外部講師によるオンライン講演会(高知大学 長崎慶	生徒アンケート		
日	三先生) 2 年生生徒 22 名	(Google Form活用)		
10月23	第2回世界の言語検討・研究推進委員会	意見交換、所感		
日				
11月10	「世界の言語」公開授業 ハイブリッド型で実施	参加者アンケート		
日		(Google Form活用)		
11月24	中国 重慶女子職業高校とのオンラインでの交流	アンケート		
日		(SchoolTakt 活用)		
12月1日	外部講師によるオンライン講演会(高知大学名誉教授	参加者アンケート		
	山岡耕作先生)対象:1年生全生徒	(Google Form活用)		
12月3日	「グローバル探究」公開授業 ハイブリッド型で実施	参加者アンケート		
		(Google Form活用)		
12月8日	第3回世界の言語検討・研究推進委員会	意見交換、所感		
2月2日	外部講師によるオンライン講演会(株式会社リアルニ	参加者アンケート		
	ュージーランド 藤井巌氏、ニュージーランド在住)	(Google Form活用)		
	対象: 1 年生全生徒			
	「世界の言語Ⅰ」耳成南小学校との交流			
2月9日	「世界の言語!」手話講座 オンライン配信			
3月7日	フランス サンテレーズ高校とのオンラインでの交流	参加者アンケート		
		(Google Form活用)		

4. 代表的な実践

①-1 7月8日にオンラインで、9th International Congress of the EDiLiC Association に参加した。同学会は多言語教育についての学会であり、ギリシャが主会場として開催され、世界各国から参加者がオンラインで参加した。奈良教育大学教職大学院吉村先生とともに、「世界の言語」についての取り組みと評価について、およびそれによる生徒の変容について英語で発表を行った(写真①②)。



写真① 学会発表の様子①



写真② 学会発表の様子②

①-2 11月8日に「世界の言語」の公開授業を行った。公開授業では、デジタルポートフォリオシステムについても紹介し、情報交換を行った(写真③. ④)



写真③ デジタルポートフォリオシステムなどに関する情報交換会の様子



写真④ 公開授業の様子

②-1 韓国 延世大学との文化交流

6月16日に、世界の言語 II で韓国語を選択している生徒を対象に、韓国延世大学教員と同大学大学院生と遠隔会議システムを用いて交流を行った。韓国の文化や延世大学の特徴について説明を受けるとともに、韓国語を使った交流をした(写真⑤)。



写真⑤ 韓国 延世大学との交流の様子

②-2 中国 重慶女子職業高校との文化交流

11月24日に中国 重慶女子職業高校の生徒と、世界の言語 II で中国語を選択している生徒の間で、遠隔会議システムを用いて交流を行った。学校の紹介や互いの国の文化について紹介し

た (写真⑥⑦)。



写真⑥ 中国 重慶女子職業高校との 交流の様子①



写真⑦ 中国 重慶女子職業高校との 交流の様子②

②-3 フランス サンテレーズ高校との文化交流

3月7日にフランス サンテレーズ高校の生徒と世界の言語でフランス語を選択している生徒の間で、遠隔会議システムを用いて交流を行った。学校の紹介や、アニメや食に関する日本の文化をフランス語で説明し、意見交換をした(写真⑦⑧)。



写真⑦ フランス サンテレーズ高校 との交流の様子①



写真® フランス サンテレーズ高校 との交流の様子②

5. 研究の成果

①応用可能なデジタルポートフォリオシステムの開発

A)昨年度は主に、株式会社コードタクトが提供するスクールタクトを用いて、生徒への課題配布と回収を行った。デジタルデータで提出された課題は、学習の記録として学習の振り返りに用いてきた。スクールタクトは学習ツールとしては直感的でわかりやすいが、「世界の言語」のように複数の教員が担当する授業では、生徒の提出物を時系列でまとめ、その変容を比較するためには不向きであった(図1)。そこで、提出物をGoogle Classroomで回収する仕組みを開発した(図1)。Google Classroomでは、複数の教員が課した課題に対する生徒の提出物を時系列で並べ、一覧で確認することができた(図2)。

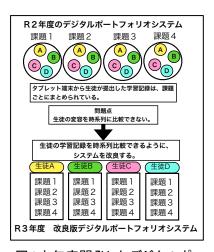


図1本年度開発したデジタルポートフォリオシステムの概略

「世界の言語」で開発したデジタルポートフォリオシステムを理科「生物」でも使用した。生 徒の提出物の確認を容易に行えるようになった。

姓で並べ替え ▼	10月27日 世界の言 語 韓国 (100点満点)	10月22日 世界の言 語 韓国 (100 点満点)	10月16日 世界の言 語 韓国 (100 点満点)	期限なし (フラン ス語第4	期限なし (フラン ス語第2	期限なし (フラン ス語第1	10月14日 (フラン ス語第4	- 10月6日 (フラン ス語第3	9月28日 (フラン ス語第2
nozomi 1005-28	未提出	未提出	90 期限後の完了				~	未提出	未提出
osuke 1005-38	未提出	未提出	未提出				未提出	未提出	未提出
puradahanhikaru 1005-02	80	90 期限後の完了	80 期限後の完了				未提出	未提出	対限後の5
raiki 1005-19	75 期限後の完了	95 期限後の完了	70				~	未提出	期限後の対
naima 1005-09	85	70	75	提出済み	提出済み	提出済み	✓ 期限後の完了	~	~
Preina 1005-07	80 期限後の完了	80	95		提出済み	提出済み	~	~	~

図2. Google classroom でみた生徒の提出物一覧

② オンライン国際交流の実践・ノウハウの蓄積

本年度は、オンライン会議システムを用いて、本研究対象の授業で13回の遠隔授業を実施し

た。国内だけでなくアメリカ、ニュージーランド、マレーシア、中国、韓国およびフランスの研究者や高校生、大学生ともオンラインで交流することができた。生徒の感想の一部を以下に挙げる。どの生徒も、オンラインでの交流にも関わらず、相手国の文化について理解し、国際感覚を育む機会を持てたと感想を述べている。

中国の文化をたくさん知ることができて、とても楽しい時間でした。前よりもずっと中国に行きたくなりました。 初めて、中国の方たちとの交流がオンライン上ですができて、とても良かったなと思いました。

女子特有の話題の時に特に盛り上がっていて、やはり国や言語は違っても同じやな一と思いました。ぜひ行ってみたいなと思いました。

またとない貴重な体験だった。中国がどういうところかよくわかったし、自分たちの発表も日本の素晴らしさについてうまく伝えられた。

もっとこんなふうに色んな国と繋がれたらいいなと思いました。世間的に直接は難しいけどオンライン上ならまだできやすいと思うのでもっとコミュニケーションを取りたいと思いました。国際でしかできないような取り組みだと思うので積極的に行っていきたいです。

6. 今後の課題・展望

本校では過去2年間にわたり、パナソニック教育財団実践研究助成を受けてきた。2020年度は、5つの言語を学習する「世界の言語」において、生徒のメタ認知を喚起し、主体的に学習に取り組めるようなデジタルポートフォリオシステムの開発を行った。本年度は、デジタルポートフォリオシステムを改良・発展させるとともに、遠隔コミュニケーションツールを用いて、オンライン国際交流を実施してきた。その結果、生徒が主体的に学習に取り組める環境の整備と、距離の制約を受け



ない国際交流のノウハウの蓄積ができた。興味深いことに、教員主導で行ってきたこのような取り組みを続ける中で、生徒から「世界の文化をもっと知りたい」、「世界中の人と繋がりたい」、「他の人と話し、考えを深めたい」などの要望が寄せられるようになった。そこで次年度は、生徒の主体的な学びを育むため、さまざまな ICT 機器を整備した協働学習拠点「つながる一む」を設置する。そしてこの「つながる一む」において、3つの「C」を整備し、発展させる。【Cooperation】生徒同士が助け合い、学びを深める環境を整備する。【Connection】遠隔会議システムを用いて、生徒が海外を含め多くの人と自由につながれる環境を整備する。【Communication】生徒がお互いを尊重し、自由に議論できる環境を整備する。また、「つながる一む」の設置と運営は、教員と生徒が対話を通じておこなうことで、教員と生徒が協働する環境を構築する。

7. おわりに

今年度は実践研究助成を頂いたことで、ICT 機器の整備ができ、大変感謝しております。また次年度に向けての経験を積むことができ、より研究の発展が望めるようになりました。

8. 参考文献

- (1) 吉村雅仁 (2020)、外国語教育・学習研究に関する国際シンポジウム (GOETHE INSTITUT)、基調講演
- (2) CEFR: ヨーロッパ言語共通参照枠 (Common European Framework of Reference for Languages)、https://www.coe.int/en/web/language-policy/home